

文学作品を読む自閉スペクトラム症者

「脳の多様性」と「当事者批評」

横道誠

1. 脳の多様性と想像力の問題

発達障害は現在の正確な医学用語で「神経発達症群」と呼ばれる (APA, 31)。この神経発達症群を疾患や障害としてではなく、「脳の多様性」として理解する動きが高まっている。他方で、実は全人類が「脳の多様性」を生きていて、発達障害者は「脳の少数派」を、発達障害がない「定型発達者」は「脳の多数派」を生きていると考える見解もある (村中 2020, 77-78; 横道 2021, 220)。本稿は、「脳の少数派」に着目することで、広義の「脳の多様性」の理念に貢献することをめざす。

神経発達症群のひとつ、自閉スペクトラム症 (以下、「ASD」と呼ぶ) の説明として、かつて想像力の障害が指摘されることが多かった。この観点は、「アスペルガー症候群」の用語を考案したローナ・ウィングが提出したものだ (Wing 1981)。ASD 者のニキ・リンコは、この想像力の障害を「想像力が、世俗の生活の役にたってくれない障害」と言い換え、「想像が足りない」、「想像がまちがっている」、「想像が過剰」という三種に分けている (ニキ 2007, 9-10)。つまり、ASD は想像力が単純な仕方で欠落している事例に限定されない。ASD 者は多数派とは異なる想像力のあり方で、脳の多様性を体現していると考えられる。

2. サヴァリーズの研究、『みんな水の中』、当事者批評

ラルフ・ジェームズ・サヴァリーズは 2018 年に *See It Feelingly: Classic Novels, Autistic Readers, and the Schooling of a No-Good English Professor* という研究書を刊行した。『感覚いっぱいに見て——古典的小説、自閉症の読者、そしてダメな英語教授による学び』と訳せるだろうか。同書は岩坂彰によって翻訳され、2021 年にみすず書房から『嗅ぐ文学、動く言葉、感じる読書——自閉症者と小説を読む』という邦題で刊行された。

サヴァリーズはこの書物で述べている。ASD 者は、「遅延解読」によって、「カテゴリー未満」の様相を把握し、「表面的にはばらばらのものごとがつながりあっているかもしれない様子を、表面的にはつながりあっているものがばらばらかもしれない様子を見る」ことができ、定型発達者は「社会的な関係」を理解するのが得意なのに対して、ASD 者は「純粋な関係」を理解するのに卓越している (Savarese 2018, 72)。

結果的に、ASD 者は定型発達者よりも「超凝視」によって、多くの細部に注目し、その感覚に圧倒される (Savarese 2018, 38)。人間を特別扱いすることなく、動植物や生きていない物体と親密な関係性を結ぶ (Savarese 2018, 111)。定型発達者がみずから登場人物になろうとする

憑依傾向を持つものに対して、ASD 者はそれを拒絶する (Savarese 2018, 183)。サヴァリーズの指摘したこれらの ASD の特性を、本稿は別の角度から確認する。

本稿の狙いは、もうひとつある。それは私が記録するエスノグラフィーが「当事者批評」の構築に寄与することだ。当事者批評とは精神科医の斎藤環が拙著『みんな水の中』を評する際に用いた造語に由来する。

本書でもっとも興味深いのは、こうした特異な世界の記述に際して、数多の文学作品が縦横に引用される点だ。従来の当事者研究が自然科学的な記述を目指すのに対して、横道は「文学および芸術と関係づける」ことを目指す。近年注目を集めている「中動態」概念も、発達障害者にとっては日常的なモードということになる。彼らはまるで、哲学の概念を感覚的に基礎づけ、観念の受肉を試みるかのようだ。／そう、私たち定型発達者（マジョリティー）にも、文学や芸術を通じて発達障害者の世界の一部を共有し、横道のいう「脳の多様性」に思いを馳せることができる。その時過去の傑作群は、まったく異なる相貌をもって立ち現れるだろう。これが面白くないわけがない。その意味で本書は批評の書だ。／作品や作家を診断するのが「病跡学」なら、ここにあるのは病跡学を反転させた「当事者批評」という新しい可能性の端緒なのだ（斎藤 2021, 28）。

本稿は発達障害者が文学作品の読解をつうじて立ちあげる世界観を明らかにする。それはそのまま、発達障害者が人間社会をどのように見ているかを示す批評的衝撃力を持つ。当事者批評によって、本稿は人間存在に対する従来とは異質な視線を獲得したい。

3. 松井さん——火星のミス・マーブル

40 代の女性、松井さん（仮名）は中部地方の出身。教育熱心な家庭に生まれ、3 人姉妹の長女だった。幼稚園児だったときに、いまでも詳細を打ちあけられないという衝撃的な出来事を体験した。その体験から、「自分が仲良くなりたいた人は、私と仲良くなりたくないんだ」と確信するようになった。松田聖子のファンになり、彼女をプロデュースする側に回りたと思った。

小学校中学年のころは「依存症的に読んでいた」と語る。学校の図書室に行き、梯子を登って古い児童文学全集を手に取り、借りだして読んだ。ギリシア神話やアレクサンドル・デュマ・ペールの『モンテ・クリスト伯』が好きだった。家では家具のカタログを読んだり、百人一首のカセットテープを聞いたりした。高学年になり、画家のアンリ・ド・トゥールーズ=ロートレックの絵に魅了された。

中学生のころから趣味の中心が音楽に移行した。同級生の影響で FM ラジオを聴くようになり、洋楽に夢中になった。初めて買った CD はペット・ショップ・ボーイズのアルバム『イントロスペクティヴ』。日本の曲は、歌詞の内容が直接的に頭に入ってくる感じが不快だった。「ほかの人の感情や価値観が入ってくるのがいやだったんだと思います」。厳しい塾に通わされたが、体罰への怯えから、宿題を余計に先延ばしするようになった。

読書に際限なく没頭することに気がつき、本を読むのを自分に禁じていたが、夏休みには例外的にアガサ・クリスティーのミステリー小説を読んだ。特にミス・マープルが、「誰それは昔の知り合いの誰それに似ている」などと人間観察にもとづいて推理するのに説得力を感じ、「人間図鑑みたいな感覚で読んでました」と語る。「人間に興味があるんです。でも関わりたくはありません」。

発達障害者にとって謎に満ちた人間社会、定型発達者たちが構築した生き地獄を自分なりに研究して、他者に対する洞察力を磨いていた。私は、テンプル・グランディンが自分を地球にやってきた「火星の人類学者」だと喩えていたことを思いだした（サックス 1997, 274）。松井さんは、言うなれば「火星のミス・マープル」だ。なお私は大学院生のころ、仲間内から「まるでゲシュタポのようだ」と指摘されたのだが——ゲシュタポとはナチス・ドイツの秘密警察——、この「日本のゲシュタポ」は、もちろん「火星のミス・マープル」の同義語だ。

中学時代、雑誌を読むことは特例で自分に許していた。音楽情報誌『rockin'on』を購読し、競馬情報誌『優駿』を読んでいた。競馬を好きだったが、いま思うと騎手の武豊の「顔ファン」だったとを感じる。すぐ下の妹が買っていた『Olive』や『エムシーシスター』も読んでいて、流行には敏感だった。都会でフランス映画を見るのに憧れた。少女漫画は『別冊マーガレット』に掲載された作品が好きで、くらもちふさこ、岩館真理子、紡木たくを愛読した。

高校生のころは「暗黒時代」だったと語る。両親と祖母は過干渉。門限は夕方5時だった。同級生が聴いていないようなイギリスのインディーズ・ロック、シューゲイザー、アメリカのオルタナティヴ・ロックやカレッジ・ロックなどをひとりで聴いていた。ライド、REM、ピクシーズ、ギャラクシー500などが好きだった。ザ・スミスは大体のアルバムを持っている。REMやギャラクシー500のルーツを知りたくて、ヴェルヴェット・アンダーグラウンドも聴いた。この時期からいまにいたるまで変わらず好きなのは、「一人クラッシュ」の渾名で知られたビリー・ブラッグ。

自宅では落ちついて勉強できず、週末に予備校に通った。国語と英語が得意で、いずれも長文読解は満点近く取れた。小学校時代の読書から、古文は作品を知っているものが多く、得意だった。他方で数学はできなかった。予備校は3回に1回出席すれば親に連絡がいかないことに気づき、よくサボってレコード店に行き、厳選してCDを買った。参考書のお釣りを貯めていた。文房具屋も好きで、商品を眺めていると幸せになった。高校生のころも読書への関心は薄かったが、夏休みにまたクリスティーを読んだ。吉岡秀隆の顔立ちが好きだった。

都会の大学に進学した。専攻は親に決められた法学で、講義内容に興味を持てなかった。ひとり暮らしを始めたが、就寝と起床の時間はかなり乱れていた。「特性によるこだわりで、初めての家事を完ぺきにこなそうとして、毎日異常に時間がかかっていました」。入居したアパートは管理が厳しく「親に遠隔管理されている」と感じた。アルバイトは親に禁止されていたが、大学の附属図書館のバイト募集を見つけて、これならば親が納得できると予想し、実際に認められた。本当に働いているかどうかを確認するために、親が職場に現れた。

アルバイト代はCD、雑誌、服に費やした。音楽の趣味は中学・高校時代に培ったものと変わ

らなかった。ひとり暮らしを始めた初日に、レンタルビデオショップの会員になり、まえから見たかったデイヴィッド・リンチの『ツイン・ピークス』を借りて観た。ジェームズ・マーシャルが演じるジェームズ・ハーリーの顔立ちが好きだった。「両眼のあいだが開いている余白系の顔が好きなんです」。

まだ実家にいたころ、母が購読していた『暮しの手帖』で、沢木耕太郎が連載していた映画時評を熱心に読んだ。その記憶を参考にして、パトリス・ルコントの『仕立て屋の恋』や『髪結いの亭主』を観た。初めて観たときに特に感激したのは、レオス・カラックス。カラックスが分身のようにして使っていたドニ・ラヴァンの顔立ちも好みだった。だがもっとも好んだのは、フランソワ・トリュフォーの諸作品。「人間図鑑的なものの見方との強い関連もありそうです」と語る。『アメリカの夜』を観て、ジャン＝ピエール・レオがとても好きになった。「多弁系フランス人が出てくる映画が好きみたいです。アルノー・デプレシャン監督作とか」と語る。

絵画に対する趣味も深まった。モーリス・ユトリロやアンドリュウ・ワイエスの「白」が印象的な絵画を偏愛した。それらにも「余白系」を感じた。ワイエスは有名な「クリスティーナの世界」は苦手だという。「展覧会で見た現物に圧倒されて、名画だとは感じましたが、大仰な印象があって、動的に描かれたクリスティーナに現実の厳しさを感じてつらかった。ピンクの服に黒っぽい髪の毛の組み合わせも苦手な配色です」と語ってくれた。ほかには、ラウル・デュフィのデザイン感性が好きだった。

2年生までは無難に単位を取っていたが、3年生になって就職活動の準備を始めると、調子が狂った。実家からは、大学を出たら実家に戻るように、有名企業に就職するようにと指令が来ていた。恐怖心を抱きつつ説明会に行ってみると、自己分析をしなさいと言われ、やってみると「自分には悪いところしかない、どうしよう」と驚いた。それがきっかけで身動きが取れなくなった。休学と復学を繰り返えし、計6年在学して、必要単位は残り1.5科目分の6単位だったが、卒業できなかった。

在学中は、親に隠れて同級生と男女交際をしていた。長期休暇は親の指示で実家に帰っていたため、交際相手は不満に感じていたと語る。「相手の人はどうやって自分とコミュニケーションを取って良いのか悩んでいたようです」と松井さん。話題共有の道具として、マンガを貸してくれた。小林よしのりの『ゴーマニズム宣言』が多かったが、内容はほとんど記憶に残っていない。

4年生から名門大学に通っていた別の相手と交際するようになった。その人は大学があった都会で就職したが、自分が留年しているあいだに転職し、東京の会社に行くことになった。結婚して一緒に行かないかと誘われ、話に乗った。留年していた娘に対して親は理想を押しつけられなくなり、相手の学歴が良かったことから、結婚に賛成した。

結婚願望はなかったから、結婚を利用したと感じている。結婚生活は続いているが、続けるつもりなく結婚したと語る。「奥さんの役割をちゃんとしていません。パートナーとしても不誠実なところがあります」。友だちを作れないから、体を使って異性と関わるようになった。

2010年代前半、「おとなの発達障害」が社会に認知されるようになった。だが松井さんはその情報を得ていなかった。鬱状態が続いていて、精神科に通ったところ、ASDと診断され、その

二次障害として鬱状態になっていると指摘された。それから 10 年弱が経つ。

4. 河野多恵子『みいら採り猟奇譚』

まず河野多恵子の『みいら採り猟奇譚』を、松井さんと読むことにした。

河野は 1926 年に生まれ、谷崎潤一郎の作風に影響を受けた作家。1963 年に『蟹』で芥川龍之介賞を、1966 年に『最後の時』で女流文学賞を、1969 年に『不意の声』で読売文学賞を、1977 年に『谷崎文学と肯定の欲望』でふたたび読売文学賞を、1980 年に『一年の牧歌』で谷崎潤一郎賞を、1991 年に『みいら採り猟奇譚』で野間文芸賞を、2000 年に『後日の話』で毎日芸術賞を、2002 年に『半所有者』で川端康成文学賞を受賞した。1984 年に日本芸術院賞を受け、1987 年から大庭みな子とともに女性初の芥川賞選考委員に、1989 年から日本芸術院会員に任命され、1999 年に勲三等瑞宝章を受けた。2002 年に文化功労者になり、2014 年に文化勲章を授賞。2015 年に亡くなり、従三位に列せられた。文壇できわめて高く評価された作家と言える。

『みいら採り猟奇譚』は、第二次世界大戦前夜から第二次世界大戦末期のとある夫婦を描いた長編小説。物語が始まる時点で夫の正隆は 38 歳、妻の比奈子は女子専門学校を出たばかりの 19 歳。正隆はドイツ人の血が入ったクォーターだが、妻の比奈子はむかしの日本人女性で、両者の体の大きさの落差が何度も強調される。夫婦ともに医者の家系に生まれた。正隆も医者で、比奈子は主婦として夫を支える。だが、この夫婦には秘密がある。マゾヒズムの趣味を持つ正隆は比奈子をサディストとして育てようとし、彼女は実際にその素質を開花させる。結婚生活 4 年目、その秘めやかな夫婦生活の帰結として、比奈子による正隆の「快樂死」が成就する。

執筆された箇所のはほとんどは、世情の綿密な把握や夫婦間の交流の克明な描写に割かれている。日常に関する執拗な叙述に、ときおり特異な夫婦の奇妙な愛の営みが挟みこまれている。戦局が悪化するのにもなって、異常性愛は苛烈なものになっていく。比奈子は道具などを使って正隆を激しく打ちすえる。日常は戦争の異様さに染まってゆき、性愛生活は異常ながら、夫婦の愛は「快樂死」に向かって、純度を増してゆく。

松井さんは高校生のとき、朝日新聞の文芸時評で『みいら採り猟奇譚』が絶賛されているのを読んで気になっていた。「みいら採り」というのが、なんだかロマンチックな感じがして。「ミイラ採りがミイラになる」のことわざから、人間の愚かさ、勇敢さ、儂さを感じていました」と語る。大学時代、図書館でアルバイトをしたことから、本に触れる機会が多くなった。この作品を借りると、男性の嘱託職員は帯に書かれた梗概を見て「なんてすごい本を読むんだ」とびっくりしていた。

松井さんがこの作品に惹かれる理由は、なによりも丁寧な書き込み具合だ。稠密な記述から、場面ごとのイメージが無理なく湧いてくる。松井さんは小学校のときにギリシア神話の本で読んだ鍛冶の神ヘーパイストスについての記述を連想する。どの本か思いだせないが、この神を産んだ女神ヘーラーは、わが子が奇形児だと知って天から海底へ投げおとしてしまう。その際、「10 日 10 晩も落ちつづけた」と表現されていた。そのような視覚的描写に心がときめく。

松井さんは『みいら採り猟奇譚』の「絶品エピソード」としていくつかの場面を挙げてくれた。

結婚前に正隆が、比奈子から嫌いなものを聞きだそうとする。彼女は鳥が嫌いなため、その場に鳥がいるのを気にする。そこから、最後に籠から鳥が放たれるあざやかな展開（河野 1990, 32-34）。比奈子は性行為の回数を帳面に記録しているが、異常性愛が混じってきてから、それを性行為として数えるべきかどうかと悩み、やがて記録を諦める（河野 1990, 143-144）。また、比奈子の実父が尋常でないくらい家の建て替えを繰り返してきた逸話。その過程の丁寧な描写が松井さんにはおもしろい（河野 1990, 49-51）。

松井さんは、これらの場面、特に性交渉の記録に関する叙述を読んだときに、「ここまで描写するのか。この本はすごい」と感動した。松井さんを満足させるのは、ASD に備わった細部へのこだわりや規則性への愛着だと考えられる。

マゾヒズム趣味によって皮膚が痣だらけになっている正隆は、戦局の悪化のために湯が出なくなっている真冬でも、銭湯に行かずに自宅で水風呂に入る。比奈子は入浴を手伝おうとし、正隆は断るが、比奈子は強引にポンプ押し of 権利を奪う（河野 1990, 164-166）。だが比奈子に関して、「毎朝の水風呂が始まってみると、それは彼女にとって思っていたほどの刺激とはならなかった」と語られる（河野 1990, 168）。真冬に水風呂に入るということは、たんに仕方ないから発生している出来事で、異常性愛に刺激を与えない。松井さんはその法則を理解したとき、陶醉を感じた。

これらの逸話では、それぞれの行動を選ぶ人間心理の仕組みが整理され、解明されている。それは世界の真実を開示している。それは ASD によく指摘される論理性への偏愛を満足させる。

私は、水風呂の記述に関して松井さんがいちばん好きな部分は樋筒に関するものだと教えてもらったときに、細部への愛好もまたある種の論理性なのだと理解した。

湯殿の外の通路の腰板添いに、樋筒が取りつけてある。一端は短く曲げて、湯殿に作った丸孔に嵌め込まれ、もう一端は井戸のポンプ台に達し、四角い大型の漏斗となって据えられている。ポンプの口は真っ直ぐにすればそこへくるし、横へ向ければ下は三和土で、バケツでも盥でも置けるのである（河野 1990, 162）。

すなわち、「論理」への愛着は、純粋に抽象的なものではなく、具象的な実体を志向している。

松井さんは「作り話としてよくできている」という表現を何度か使っていた。彼女は小説を読むと「この年齢の子どもはこんな言葉遣いをしない」、「現実では物事はこういうふうには展開しない」、「こんな都合の良い人物は出てこない」などとしきりに気にしてしまう。「虚構性が高い創作は苦手なのでしょうか」と尋ねると、「そうではないんです。独自の世界をみごとに構築していると、気にせずに読めます」と答える。『みいら採り猟奇譚』はその点で松井さんにとって傑出した作品なのだ。

しかし、正隆のかつての恋人が手紙を送ってくるくだり（河野 1990, 134-142）は、松井さんには「作り込みすぎ」だと感じられる。作為性が強すぎると感じ、好ましく感じられない。

松井さんにとって、『みいら採り猟奇譚』の大きな魅力は、登場人物の感情が書かれていない

ことだ。この作品は人形劇や紙芝居のような、平面的な印象を与える。松井さんは、それは小学生のときに読んだギリシア神話の魅力に重なると語る。これは、ASD 者には定型発達者に対する共感能力が欠けていること——逆に ASD 者同士では「同種」として共感できる (Komeda et al. 2015) ——に関係しているのかもしれない。世の中には、定型発達者への共感をむりやりに求められる作品が多くて、息苦しく感じてしまう。

私は、この作品の特に技巧的に見えるいくつかの側面について意見を求めた。

比奈子のかつての婚約者、邦夫との思い出の地として「貝波」という架空の街が設定されている。物語の終盤で正隆と比奈子はこの街に疎開し、「快樂死」へと進んでゆく。閉じた「貝」のなかで戦争の「波」から守られた世界。展開も「貝波」の名称も、工芸品のように作り物めいている。夫婦ふたりで小さなサザエを味わって、「しかし、互に相手の味わったおいしさは、識り合うわけにはゆかないのだ、と比奈子は思う。考えてみると、交りできえ、そうなのかもしれない」(河野 1990, 310-311) と語られる。

松井さんは述べる。「ちょっとメロドラマっぽいとは思いますが。でも創作世界の現実との距離感がこういう感じなのはちょうど良いと感じます。作品の狙いも理解できます」。サザエに関しては、「食べ物に興味がないから、料理の描写は読みとばしてしまいました」と語る。

貝波に疎開している際の逸話で松井さんが好んでいるのは、家に迷い込んできたガマをチリ取りで誘導して外へ出してやるくだりだ (河野 1990, 307)。太ったガマが出ていくまでのしっかりした描写に惹きつけられる。本土決戦が迫るなかで、閉ざされたような貝波の世界に夫婦ふたりきりになって、幸せそうな生活が描かれる。そこに松井さんは極上の美を見る。

それでは「快樂死」の場面はどうだろうか。四つん這いになった正隆に比奈子はまたがり、「ペガサスならば天翔けなければいけない」(河野 1990, 337)、「ほんとに爽快。この人はやっぱりペガサスだったんだわ」(河野 1990, 338) と喜ぶ。このいわば「ペガサスごっこ」の果てに、比奈子は正隆を縊死させる。このクライマックスにあたる場面は、この小説のもっとも工芸品めいたくだりだ。単行本が刊行された直後に、遠藤周作は述べた。

小説の結末は実に美しく、みごとだ。警報下の灯火管制の夜、夫の首に麻縄をかけ、ペガサスのように天翔けることを夫に命ずる場面。そしてそれを実行した夫の首をしめ、恍惚の極地である死を与える場面。マゾヒストの究極の願望は恍惚死した自分の死顔を支配者に見てもらおうことだと私はこの小説を通して驚きながら始めて〔原文ママ〕知った。／しかし行きつくまで行ったこの最後の行の彼方に私は無を見ない。ペガサスが天翔けた星々の宇宙と何か大いなるものの声を聞く思いである。それを感じさせたのは作者の腕だろうが、私は彼等夫婦が求めた至上の愛の向うに神がいると考えざるをえない (遠藤 1991, 296)。

カトリック信徒だった遠藤らしい評だが、いずれにしても現実的なものから空想的なものへの跳躍が図られている。しかし松井さん自身は結末部について「ああ、もう物語が終わってしまうんだな」としか感じなかったと語る。強い関心を持たなかったようだ。

ドイツ語を教える私は、この作品でドイツに関する要素が強調されていることについても意見を交換してみたかった。冒頭近くでは、当時の日本のヒトラーへの熱狂が描写される。最後近くでは、ナチス・ドイツ滅亡の過程が、独特な筆致で強調されている。松井さんは「比奈子の外見については説明がないのに、正隆は日本人離れした風貌がときどき記述されています。ヨーロッパ系の白い肌が赤くなっているのは印象的でしょうね」と答えた。私が「ドイツは燃えあがっていき、正隆の肌も燃えあがっていくというわけですね」と冗談を言うと、松井さんは答えた。「自分たちがコントロールできない状況の変化が描かれています。そういうことへの不安感には共感できます」。ASD 者は定型発達者よりも先行きを見通すのが苦手だという特性を持つ (Sinha 2014)。そのためにこの作品の不穏な世界観は、松井さんにとって共感を誘うように働くのかもしれない、と推測された。

ところで、この作品の夫婦関係は松井さんにとって理想的なものなのだろうか。松井さんは、正隆の願望は満たされたものの、そのために嫁に入った比奈子が殺人者として取りのこされるのは身勝手ではないかと回答した。「正隆は自分の願望を実現するのが巧みだったと思います」。

マゾヒズムとサディズムについては理解できるかと尋ねてみた。「以前は分かると思っていたんですけど、いまは分からないと感じます」とのこと。「性的嗜好にドン引きした経験があります」。だが彼女の私生活に関わるため、この話題はそれ以上追及しないことにした。

5. パトリック・ジュースキント『香水』

パトリック・ジュースキントは、長編小説『香水——ある人殺しの物語』(1985年)で知られるドイツの作家。『香水』は約50か国語に翻訳され、2000万部以上を売りあげた。20世紀のドイツ文学でもっとも成功した作品のひとつと言える。

18世紀、パリの貧民街に生まれた孤児ジャン＝バティスト・グルヌイユは、恵まれない少年時代を過ごす。生得的にありとあらゆる香りを嗅ぎ分け、分類し、空想のなかで調合する能力を持っていた。あるとき、道端で見かけた少女の香りを自分のものにしたい願望が高じて、彼女を殺し、その香りを存分に楽しむ。調香師に弟子入りした彼は、極上の香水を矢継ぎ早に作りだしつつ、調香の技術を学ぶが、抽出できない香りがあることに落胆する。グルヌイユはパリを出て、世捨て人になり、自分だけに匂いがなく初めに気づく。彼は旅を再開し、香水の聖地グラスでパリよりも進んだ調香技術を学ぶ。この街の少女たちをつぎつぎと殺し、体臭を抽出して究極の香水を作り出す。彼は逮捕され、拷問を受け、処刑されることになるが、集まった群衆はグルヌイユが振りまいた香水に翻弄され、彼を神の子と崇めたり、乱交に耽ったりする。運命に勝利したはずのグルヌイユは人々に失望し、貧民街に戻ると、残った香水を自分に振りかける。人々は群がり、嘔みつき、刃物で切断し、彼をばらばらにして食べつくす。

松井さんにこの作品との出会いを尋ねたところ、「20歳か21歳のころ。あまり覚えていません。雑誌の紹介欄で知った気がします」と言う。「本は文庫本を買うことが多かったんですけど、ジャケットの美しさに惹かれました」。実際、『香水』の邦訳単行本は、愛書家にもうれしい美しい装丁の書物だった。ジャケットに使われている絵画は、ロココ時代のフランスの画家アントワ

ーヌ・ヴァトーによる『ユピテルとアンティオペ』。この絵は、ジャケットで見ると少女の香りを集めるといふ題材にふさわしく、オリジナルで見ると、その香りを集めるために連続殺人を犯す男の物語にふさわしく感じられる（下図を参照）。



小説の第一印象は、「匂いの描写がブワッと来て。すごい情報量で」と語る。松井さんの感受性の解像度の高さにとって好ましい描写だった。物語の展開にわざとらしいと感じる要素はなかったかと尋ねると、昔話や法螺話みたいに、つぎつぎにありそうにない展開が起こるが、ディテールがしっかりしていて、独自の理屈で丁寧に補強されている、都合よく進むが、物語には説得力を感じたと語る。

松井さんと同じく ASD を持つ私は、この小説で事物がしばしば列挙される場面に惹きつけられる。たとえばバルディーニの店の品揃え（ジュースキント 1988, 65–66）や彼の香水の材料と処方（ジュースキント 1988, 135–136）に関する記述。松井さんもこのような描写を愛好するが、特に好きなのはつぎの記述だと言う。

しだいに釜が煮えたってくる。あるかなしかのしたたりが始まり、ついで細い糸状にスーッと走る。〈ムーア人の頭〉からのびている三本目の管から蒸留液が流れて、バルディーニが下からあてがったフィレンツェ産のコップにしたたり落ちる（ジュースキント 1988, 137）。

これは『みいら採り猟奇譚』で松井さんが気に入っていた樋筒の構造の描写に通じるものだ。どちらも細長い管を液体が流れていく。そのような描写に惹かれるのはなぜだろうか。抽象的で図形的なものが、具象的で現実的なものと融合している様子に惹かれるのだろうか。私は松井さんに、私がかつて研究していたローベルト・ムージルの小説を勧めたくなった。

グルヌイユがガラス、真鍮、陶器、革、穀物、砂利、土、血液、材木、とりたての魚の匂いを蒸留しようとして、無駄に終わる場面がある（ジュースキント 1988, 142–143）。この場面はどのように思ったかと尋ねると、答えてくれた。「愚かで哀れで。発達障害者もこの手のことはやらかしてしまうから、親近感がありました。普通とは違う手順で物事に取りくんでしまう」。

この作品のなかでいちばん好きな場面を尋ねると、海の匂いが話題になる場面だという。

海の匂いは単純だった。しかし雄大で、どの匂いともちがった唯一独自の味わいをもっていた。グルヌイユはそれを魚や塩、水や海藻やそのほかの匂いに分解するのを躊躇した。むしろ丸ごと呑みこんで記憶にとどめ、そのままでのしみたい。海の匂いはことのほか気に入った（ジュースキント 1988, 51）。

松井さんはここに「余計な欲が混じっていない素朴な幸福」が語られているのが好きだと語る。ASD 者は海を好む傾向があるため（横道 2021, 68-69）、松井さん自身は海が好きですかと尋ねると「感覚過敏だから、体に砂が貼りつくのがいやでした。でも泳ぐのは好きでした」と言う。

『香水』は登場人物に感情移入しづらい作品だ。特に主人公は、感情の描写が希薄だ。これはギリシア神話や『みいら採り獵奇譚』に通じるのではないだろうか。予想どおり、松井さんはこの作品のその性質を好ましいと感じていた。私はマックス・リュウティの昔話に関する様式研究に言及した。昔話は、現実と非現実が連続している「一次元性」や現実的な身体性が欠如しているという「平面性」などによって特徴づけられる（Lüthi 1981, 8-24）。そのような人物造形が、ASD には親密に感じられるのではないか。というのも、ASD 者はしばしば空間的な立体を奥行きを欠いたものとして把握したり、ものごとの多層性の把握を苦手に感じたりするからだ（横道 2021, 75-76; 115-116）。松井さんは「そうかもしれません」と答えたが、私は自分の質問が誘導尋問になってしまったことを反省した。

松井さんが主人公以外で気に入っている登場人物は、マダム・ガイヤール。その秩序と公平性のあり方が ASD に通じるからだと言ふ。

マダム・ガイヤールはおそろしく秩序好きで公平だった。預かった子どものうちのどの子もをえこひいきするでもなく、どの子に邪険にあたるわけでもない。食事は一日に三度、おやつなど一切なし。二歳までは日に三度おむつを代える。二歳をすぎても漏らす子は平手打ちをくらわして、食事を一度抜く。養育費のきっかり半分を育児代にあて、残りの半分が取り分。安くあげられるからといって養育費をへつらないし、生死にかかわるからといって、びた一文余分に費やさない。さもないとひき合わない商売というものである（ジュースキント 1988, 30）。

やはり松井さんは「火星のミス・マーブル」だなど私は思った。クリスティ的人間図鑑への志向。登場人物の多くは、グルヌイユと出会うことで不幸になる。「なるほど、これも昔話に通じますね！」と彼女は発言した。昔話では、同じ素材が執拗に反復される。

人間の醜悪さが誇張されすぎていませんか、と私は——自分が特にそう思うということではなく——尋ねてみた。すると彼女は言った。「この話は都合よく進みすぎるところがいい。人を食ったようなかたちで、どんどん進む。人間という存在自体を批判している」。私は唸らされた。

一種のご都合主義によって、ASD 的なグルナイユが定型発達の人間社会と対立していることが強調されている。それが痛快だということらしい。

ところで『香水』にはポストモダン小説としての側面があり、さまざまな小説ジャンルが混沌している。教養小説、芸術家小説、推理小説、幻想小説などの諸要素が溶けあっている。その混沌とした様式を松井さんはどのように受けとめただろうか。サヴァリーズは、ASD 者がカテゴリー未満の世界の直覚的把握に長けていることを強調していた。

松井さんは語った。「源氏物語に通じるおもしろさだと感じました。源氏物語は物語の本筋に入らない要素もおもしろい」。前近代的な、混沌とした物語時空への親近感がある。私は興奮した。というのも、私はヨーロッパ文学の専門家だが、近代文学よりも前近代的な混沌とした文学状況に一層の吸引力を感じるからだ。私は「ノンジャンルのなものを好むのは ASD 的でしょうか」と尋ねた。松井さんは分からないという顔つきで、「苦にせずにおもしろいと思えます」と答えた。

私はこの小説の最大のクリシェと感じられたものについて話題にした。「グルナイユは成人直前の少女の匂いに取りつかれて、連続殺人犯になりますよね。この設定はありきたりではないでしょうか。それから、このような仕掛けに嫌悪感は抱かなかったでしょうか」。この点で『香水』は、ブラム・ストーカーの小説に代表される吸血鬼もののパロディとも言えるのだが、意地悪く見れば、創意を欠いた模造品だ。

松井さんは答えた。「高校の古文の先生が脱線するとおもしろかったんです。水を向けるとどこまでも話してしまう人で。16、17 の私たちを前にして、女性は 14 歳、15 歳がピークなんだ、って言って。世の中そういうものなんだな、と割りきりました」。若いころの教育——と言えるかどうか微妙だが——の内容は定型発達者にも大きな影響を与える。ASD 者にはなおさらそうかもしれない。

クリスティーナ・ビューラーは、グルナイユを「落ちこぼれ、怠け者、ナルシスト、誇大妄想狂、反倫理主義者、新たな救世主、反キリスト、統合失調症的または自閉症的な怪物、殺人鬼、天才」(Bühler 2007, 3) と規定している。現在、自閉スペクトラム症と統合失調症は別物と考えられているが、複数の表現型が類似し、危険因子を共有しているという指摘がある (Chisholm et al. 2015)。だが、「統合失調症的または自閉症的な怪物」という表現は、論者の時代錯誤をさらしている。それでも私は、グルナイユの匂いに対する超人的能力を、自閉スペクトラム症の嗅覚過敏が誇張されたものとして理解する立場は、ある程度の妥当性があると思う。松井さんは「表情が乏しくて、すらすらとしゃべらないのは自閉症的だと感じます」と述べる。

私の考えでは、この作品の最上位のテーマは孤独だ。自分に匂いがないグルナイユは、人並みの匂いを身につけようとする。これは定型発達者を擬態しようとしても受け入れてもらえない発達障害者の孤独に酷似している。松井さんは「特に理由なく排斥される。ひと事じゃない感じがします」と語る。

グルナイユが ASD 的かどうかという問題に関して、松井さんは「途中から急にサイコパスになった気がする」と指摘する。グルナイユが香水によって他者の心を支配しようと決めたことに

ついて、「興奮のあげくの発作ではなかった」、「感情に流されているのではなかった」、「平穏かつ軽快に、なぜそれを望むのか自問した。そして自分が徹底した悪[わる]だから、と自答した」、「答えつつ微笑を浮かべた」と叙述される（ジュースキント 1988, 214-215）。たしかにこれは ASD 者らしくなく、サイコパス的な人物造形だろう。この混同は、私たち当事者には説得力を欠いている。「火星のミス・マーブル」は見逃さない。

知的障害のない ASD はかつてアスペルガー症候群と呼ばれていて、アスペルガーとサイコパシー（精神病質）は現在でも混同される傾向にある。ウタ・フリスは、ASD とサイコパシーの違いについて解説する。

ASD 者は「意図的な共感」が弱いために、「周囲の人から冷たい人間だと誤解を受ける」（フリス 2009, 207）。そこで人は ASD 者をサイコパスと錯覚するのだが、サイコパスは表面的な挙動は周囲の人々にとって魅力的に見え、良心や罪悪感が欠如しているという特徴があつて、ASD とはまったく異なる。サイコパスには「本能的な同情が欠如し」、他方で「心理化の技能は卓越」している（フリス 2009, 209）。サイコパス児と ASD 児を比較すると、悲しみや恐怖を浮かべた人間の顔の写真を見たときに、前者では感情が高まらなかったのに対して、後者では定型発達児と同様に感情が高まった（フリス 2009, 210）。なにより、ASD 者の挙動は定型発達者にとって一般的に「魅力的」と認めてもらえないし、「心理化の技能」はむしろ劣っていると見られがちだから、ASD とサイコパシーは完全に異なる。

松井さんは、グルヌイユがさまざまな体臭の香水を作り出す場面（ジュースキント 1988, 249-257）も魅力的だと話す。「スパイ小説みたい」と言ったので、私は ASD 者のキマイラ現象を思わせるからだろうかと推測した。キマイラ現象とは私の造語で、ある種の ASD 者が他者の影響を受けやすく、自分ではない人のさまざまな「キャラ」を取りこんでしまいやすいことを指している（横道 2021, 117-118）。さまざまな場面に合わせてキャラを使いわけるのは定型発達者でも発達障害者でも同じだが、発達障害者は他者のキャラを取りこんでしまいやすいために、それらに支配されて、逆に場面ごとにうまく演じ分けをしづらくなる。

しかし松井さんにはキマイラ現象がないようだ。松井さんは「使いわけられるグルヌイユが羨ましい」と意見を述べた。グルヌイユが香水を使い果たしてあとのことを考えて不安になる場面（ジュースキント 1988, 259-261）では、「得た愛情を失う不安に似ているのかなと思いました」と語る。演じることが苦手な ASD 者は、何も演じなくなることで、見向きもされなくなることの痛切さを感じやすいのだと考えられる。

グルヌイユの「人間に対する嫌悪」、「人間に対して抱いている憎悪」が明らかになる終盤の場面（322-323）。「グルヌイユはいま、なろうことなら人間を一人のこらず地上から消してしまいたかった」、「自分がどんなに彼らを憎んでいるか、どうしてそれに気づかないのか」（323）。松井さんは、主人公は「そういうことから突きぬけていると思って読んでいた」と告白する。「松井さんにはそのような憎悪がありますか」と私は尋ねた。その返答は私の心に残った。「どちらかと言うと、人間は好きじゃない。世の中が自分を受け入れてくれてない。憎しみはほかの発達障害者より強いほうかもしれません。疎外感を抱きつつも、みんなのなかに入りたい。でもでき

ないから自分だけでいいと思っている」。

私は発達障害の自助グループに行けば、同じ気持ちの仲間に出ることを話題にしたかったが、彼女は察したからか、「当事者会でも疎外感があります」と口にした。「子どものころに、自分は人と違ってるけど、これでいいんだと思ひすぎたのかもしれない」。松井さんは閉じた世界に生きながら、どうしようもないという受動性を感じている。

『香水』は2006年に映画化された。小説の売れ行きを考えれば、かなり遅い映像化だった。原作者が安易な映像化を渋ったことが理由だった。監督は『ラン・ローラ・ラン』などで知られるトム・ティクヴァ。この映画を松井さんはどのように見たらうか。

「主役の顔を写真で見たときに、雰囲気すごく出ていると思いました。怯えた視線がうまい」、「映画館に観に行きましたが、記憶ははっきりしていません」、「色がきれいと感じました。赤毛の女の子がかわいかった。バルディーニは良い俳優〔筆者注——ダスティン・ホフマン〕を使っていることもあって、原作に比べて立派すぎると感じました」、「映像になることで、描かれる不幸が原作よりもかわいそうに感じました。グルヌイユの身代わりになって処刑される人とか。でも橋が落ちる場面は楽しかったです」。

それほどASD特有の感想ではないかなと思っていると、つぎの感想も出てきた。「香りを飛ばすためにハンカチをひらひらさせる場面がよく出てきて、その繰り返しを見ているのが楽しかったです」。反復性を好むASDの特性は「同一性保持」と呼ばれる。

ドイツでの公開当時、権威的なドイツの新聞、フランクフルター・アルゲマイネの日曜版で、ペーター・ケルテは映画をつぎのように酷評した。「基調音として残るのは、周到な退屈さだ。長編小説を映画化したときの、厳然たる標準形。渋い失望」(Körte 2006)。松井さんは「辛辣ですね」と笑った。

私が「グルヌイユを拷問する場面まではそれなりに楽しく観たのですが、処刑の場面で、グルヌイユは香水で自在に群衆を操る。自分を神の子に見せたり、乱交パーティーを始めさせたり。原作どおりですが、映像になると説得力がなくて苦笑いしました」と感想を述べると、松井さんは「あのあたりは笑ってみていれば良いのかな、と思って観てました」、「あのあたりから映像化せずにナレーションにすれば良かったのかな。でもそれはそれで難しいですね」と意見を述べた。

映画に関して、ほかに印象に残っていることはありますか、と尋ねると、「宣伝部長として桜塚やっくんが起用されていて。作品と雰囲気が違いすぎておもしろかったです」と言った。ASD者は、しばしばシュールリアリスティックな笑いを発見する名人だ。

6. 綿矢りさ『勝手にふるえてろ』

松井さんが綿矢りさの読者だと知った私は、さしあたって『夢を与える』を読むのはどうだろうかと提案した。CMの子役として芸能界にデビューした少女が、友だちに恵まれず、おとなたちに囲まれて成長し、思春期にブレイクするが、仕事で追われるなかで若いダンサーと恋仲になり、性交渉を記録した動画がインターネット上に流出し、積みあげてきたものを失うという内容の長編小説だ。

しかし私はのちに、この作品は『みいら採り猟奇譚』や『香水』を通じて迫った松井さんの文学的感受性に対して、新たな光を当てにくいのではないかと考えるようになった。というのも、『夢を与える』で主人公が体験する受動的な人生、能動的な行動（恋愛）が起こす失敗は、ASD者の人生を暗示しすぎているからだ。女性でもなく美貌に恵まれてもいず、芸能界にほとんど興味のない私にしても、この作品の至るところにASD者としての自分の人生と重なる要素を発見し、特別な共感を抱いてしまう。そこで私たちは、松井さんが推薦してくれた『勝手にふるえてろ』を読むことにした。

松井さんに綿矢作品との出会いを尋ねると、芥川賞を取る前から知っていたと語る。綿矢が高校生のころから、彼女は『インストール』によって文学通に知られていた。19歳で芥川賞を受賞した『蹴りたい背中』から女性間の恋愛を扱った近作の『生のみ生のままで』まで、松井さんは綿矢作品をほとんど読んできていて、愛読者だと語る。

『勝手にふるえてろ』の主人公で26歳の会社員、江藤良香は、退屈な現実とうんざりしながら、高校のときに片想いしていた元同級生に想いを寄せつづけている。そんな彼女に、好きだと言ってくれる同僚が現れる。良香は元同級生を「彼氏その1」の意味を込めて「イチ」、同僚を「彼氏その2」の意味を込めて「ニ」と呼ぶが、実際にはどちらとも恋人関係にない。良香にとってニは自分自身と重なり、邪険にすることができない。良香は策略をめぐらせてイチと再会し、会話をする機会を得るが、相手は自分の名前を覚えていず、失恋したと感じる。ニと交際する事になるが、口づけをするにも拒否感がある。女友だちをつうじて自分が恋愛未体験だとニに知られていた良香は衝撃を受け、妊娠したと偽り、会社を休んで、ニから離れる。しかし自宅に呼びだしたニの熱意にほだされて、良香はニと恋人になることを決意する。「いままでとは違う愛のかたちを受けとめることはできるのか？」と良香は自問する。

松井さんは良香と同じような経理の仕事をしたことがあったが、正社員の良香と異なり、派遣社員だった。「あんなふうにビシバシ言えない。正社員は強いなと思いました」と振りかえる。

綿矢作品の特徴のひとつは、相手の挙動に対する観察の鋭さ。『勝手にふるえてろ』では、「出来杉くん」についての記述が松井さんの印象に残っている。

交流会で経理の女の子たちの人気をいっしんに集めていた出世株第一位ルックス最高の営業の男性はもういない。仕事もよくできて空気もよく読めて察しも良く、でも察しが良すぎるせいで他人の言葉には常に裏の意味がこめられていると思っていた彼は、ニヤリと笑ってなにもかも把握しているかのようにうなずくのがクセで、自分の周りは敵だらけだと思っていた。主導権を常に自分で握りたがっていて、上司の下で働いていることを認めたがらず、上の命令で動くときも、「俺、が決めた、俺、がやることにしたと常に主語は自分だった。デキるのかもしれないけれどなんか生きにくそうな人だなと周りが気づき始めて人気が落ちてきたころに、辞めてしまった。辞めるときも、辞めさせられたのではなくあくまで自分からこの会社を見限ったと言い張っていたのが印象的だった。私は心の中で彼を出木杉くんと呼んで見送った。結局会社にはニみたいに嫌味を言われても気づかない図太い

人間が残り、毎日出勤している（綿矢 2010, 23-24）。

松井さんは、綿矢作品の主人公の女性たちは単純な観察者ではないと指摘する。「しばらくは観察に徹しているんですけど、冷静なばかりではなく、我慢していて、どこかで爆発して予想外の動きをする。それが自然な感じがする。共感しやすいです」。

「綿矢りさに発達障害者のような印象はありますか」と尋ねると、答えた。「芥川賞の前にもう新人賞〔筆者注——文藝賞〕を取っていましたが、作家になりたいことを学校の先生に話して、受賞を AO 入試に生かして早稲田大学に入りました。そういうところは定型発達のだと感じます」。私が「状況をじょうずに活用できる場所ですね。私たちはいつも状況に巻き込まれていますからね」と相槌を打つと、松井さんは笑った。「気がついたらこんなところに流れついてたって、なってますね」。

松井さんは綿矢作品は「力関係に敏感」だと指摘する。『勝手にふるえてろ』では、同窓会や後日開催されたパーティーで、良香はライバルたちがいるなかでどのように動くかを計算しながら行動を取る。これは発達障害者には難しいかもしれない。また高校時代の良香は、見ないふりをしながら視野の端でイチを捉える「視野見」をよくやっていた。「ああいうのは得意ですか」と尋ねると「できません」と答える。あのような要領の良いことは、ASD 者は苦手な傾向にあるようだ。

松井さんは「でも綿矢作品で」と語る。「観察によって相手を理解できて、それでコミュニケーションが通じていると感じる、親近感を抱く、という感覚はよく分かります」。また綿矢の作品には共感を抱きやすいと言う。「自分は女子力が低いって感じるんですけど、綿矢さんの本を読むと、分かる、分かるって思うところが多いので、やはり女子なんだなって思います」。

そこで私は、いわゆる「女心」が表現された場面を話題にした。

ニがもし完全に私に無関心になればどれだけ素敵だろう。ニがタクシーの座席の隅っこに座り、私の存在さえ忘れて窓の外を眺めながら物思いにふけていけば、私は彼の横顔をつくづく眺められるのに。私のことを好きだ好きだと言っていた彼が急に冷たくなったら、せつなくて好きになってしまうかもしれない。押して引く、などというテクニックではなく、本気で私に愛想をつかしてほしい。会社で会って私が話しかけても無関心な瞳で普通言葉返すだけになれば、私はつめたい大理石のうえに寝そべり、石の表面に自分の体温がほんのりと移っていくようにニのことを好きになるかもしれない（綿矢 2012, 61-62）。

松井さんは、「まあそうだよな、と思います」と答えた。自尊心が低いから、自分のことを好きになる人を評価できない。「イチが振りむいてくれたとしても、そのあとは冷淡になると思います」。私は、いわゆる「女心」もそれなりの論理性に裏打ちされているわけだからな、と考えた。その論理性を松井さんが理解できる理由が、女性としての人生経験ゆえか、ASD 者の論理思考ゆえかは分からない。

綿矢りさは刊行後のインタビューで、「ニに見つけてもらえた、良香はやっぱりラッキーだと思いますよね。だから、若干女性に都合の良い展開だなと思って書いていました」と語った（綿矢 2010）。その著者の見解を松井さんには伝えずに、終盤の場面の感想を聞いた。

良香は母親に「なんでお母さんとお父さんは結婚したの」と電話で訊いて、母親は「そりゃあ、なんとなくだよ」、「でもお母さんはなんとなく結婚しよう、なんとなくずっといっしょにしようと思える相手を見つけれられて幸せだけだねえ」と返事する。松井さんは「お母さんが的確なタイミングでいいことをいうのは都合が良すぎると感じます。むかしのテレビドラマみたいな展開」と指摘する。

それでは、良香がニに「霧島くん」と呼びかける最後の場面はどうだろうか。ここに至って、ニは等身大の人間としていわば実体化する、というのがこの小説の落とし所だ。松井さんは「その前からドラマっぽい展開になっていたの、気にせずに読んじゃった感じです」と答えた。

綿矢りさのインタビューを提示して、意見を求めた。

主人公の良香は、ひねくれているんですけど、外面〔そとづら〕は普通です。言うこともすることも、凄く普通やけど、内面でいっぱい考えている子です。12年間にわたるイチへの片思いは、恋愛未満というか、現実の恋とは違う“思い入れ”みたいなもので、感情としては幼いのかな（綿矢 2010）。

松井さんは「ASD だと思入れが強くなりますから、自分にも思いあたります」と語る。これは ASD の特性のひとつ、「こだわり」に関する意見と言えるだろう。

私は、20歳ぐらいのときは結婚なんてまったく考えず、だいぶ遅くてもいいと思っていましたが、酒井順子さんの『負け犬の遠吠え』を読んだり（笑）、婚活とか、アラサー、アラフォーとか、世の中の言説の影響を受けるから、そろそろ考えなきゃあかんのかな、自分の意識ではないけど、ほかの人がそう言ってるからそうなんかな、という感じのところにありますね（綿矢 2010）。

松井さんは「私とは考え方が違います。私は、周りは自分に関係ないっていつも感じてきましたから」と語る。

インタビュアーは「こんなにたくさん考えている、主人公の内面は非常に豊かなのに、世の中全体での存在感は薄い」と指摘し、綿矢は「そうですね」と応じる。松井さんは「自分も存在感が薄いので主人公に共感しやすかったのかな」、「あれ、いたんだね、みたいなことをよく言われます」と感想を語った。

『勝手にふるえてろ』について、ほかに強く思うことを尋ねると、「10年後の話をすごく読みたいですよ」と言う。私が「そのころの良香は、ニと離婚する妄想ばかりしているかもしれませんね」と冗談を言うと、松井さんはその冗談は流して、「大きなお世話なんですけれど、綿矢さん

の家庭が安泰な気がしないんです」と言った。「主人公たちが同じような心の動きをするから、綿矢さんもそうなんだろうと著者の像ができていて。そうだとすると、ちょっと結婚相手がかわいそうです」。

綿矢作品の全体の印象については、つぎのように語ってくれた。「どの本もそうなんですけど、文章が音楽のようです。ぜったい飽きさせないようなひねりがあって、その上でストーリーがぐいぐい入ってくるので、最初から最後までかなり同じような密度が続くような気がして、そこが気に入っています」、「『みいら採り猟奇譚』よりテンポは良いけれど、質的な一貫性という点は同じです」、「登場人物の数が限定的、90分くらいの映画のような印象の作品が多くてコンパクトなところがちょうど良い」、「どの作品を読んでも主人公が似てて楽しい」。

映画版(2017年)の印象についても意見を求めた。「セリフの言葉づかいが原作と一緒にだけど不自然さがなくてすごいなと思いました。ミュージカル的な仕掛けがおもしろい。『モテキ』を思い出しました」、「途中までコミカルに描かれているのに、街の人たちとの関係は実は空想で、良香は孤独だと分かる。びっくりしました」、「塩梅が絶妙な映画でした。メインの3人がハマってました」、「小説に出てきた小物は水玉模様など普通に女の子っぽいものですが、映画に出てくる小物は可愛いけれど個性強めでクセがありました」。そこから、映画の良香は自分の好みがはっきりした女性だという印象を受けた。

私は良香が原作ではアニメオタクなのに、映画ではそうでなくなっていて、少しキャラが変わってましたね、ニは誰から見てもウザいやつとして描かれるのに、最後はちゃんとカッコよく見えるし、ラストシーンの直後にニを演じた渡辺大知のバンドの主題曲が流れだして痺れました、などと感想を述べた。しかし私がもっとも話題にしたいのはイチだった。彼は原作では執拗に手を洗う強迫性障害者として描かれていたのに(綿矢 2012, 92)、映画では受動型のASD青年のような描かれ方をしている、と私は指摘した。

松井さんは答えた。「ASD グレーゾーンな感じ? 回避的だが場の空気はおかしくせず振るまえる。映画ではニが正式な相手役的位置づけで、イチはイケメンだけど当て馬役。だから病的なところが深掘りされなかった」。私にとっても説得的な回答だ。主要人物の外見について話しあっていると、松井さんは某俳優の顔立ちについて話しはじめ、夫は同じ系統の顔だと説明したのが、ちょっとした脱線で印象的だった。

最後に私は映画版の監督、大九明子へのインタビューを提示した。インタビュアーは「どこか浮世離れした雰囲気キャラが多数登場することによって、この映画はリアリズムの映画ではないなと思いつつ見続けていくうちに、いつのまにか哀しいまでのリアルに満ちたものへと化していくという面白さが、この映画の最大の魅力ですね。しかも決して見る側を突き放すようなことはしない」と語り、大九は「そうですね」と答える(増當 2017)。

松井さんは「人間がやらかすことはだいぶおもしろいなと思って見てました」と意見を述べた。リアリズムではないはずなのにリアルな映画。それがASD者の眼には、人間社会に取材した民族誌映画のように映る。私たちASD者は、定型発達者の世界を地球外知的生命体のようにして見つめている(横道 2021, 77-78)。「SFには親しんでこなかった」と語る松井さんだが、私と

同じ「宇宙人の眼」を持っているのだ。

7. 考察

かつて知的障害がない ASD 者をアスペルガー症候群と呼んだローナ・ウィングは、この症候群の特性を前述した想像力の障害のほかに、社会的相互作用の障害と、コミュニケーションの障害に見た (Wing 1981)。ASD の特性を、現在の診断基準を与える DSM-5 (『精神障害の診断および統計マニュアル』第 5 版) は、「複数の状況で社会的コミュニケーションおよび対人的相互反応における持続的な欠陥がある」と「こだわり」(常同的または反復的な行動、同一性への固執、感覚刺激への並外れた反応) に見ている (APA, 49)。しかし、これらは発達障害を「障害」と見なす立場の見解にほかならない。この障害を「障害」としてでなく「脳の多様性」として解釈する私たちは、ASD の特性を別の仕方でも再構成してみたい。

松井さんへのインタビューをとおして私が繰り返して確認した彼女の特性は、感覚の解像度の高さ、論理性への志向、人間観察の貪欲さ、ミニマリズムへの志向、反復性の愛好、細部への探究心、特定の顔立ちへの親和性、コミュニケーションに対する慎重姿勢だった。

私は、このうち最上位の特性は、「感覚の解像度の高さ」ではないかと仮説を立てる。熊谷晋一郎は、ASD 者でパートナーの綾屋紗月を例に出して「多くの人がモル的な処理をしているところで、彼女はずっと分子的な処理をしている」と表現しているが (國分 / 熊谷 2020, 204-205)、私はこの ASD 観に賛同したい。この「感覚の解像度の高さ」ゆえに、ASD 者は定型発達者が構築した人間社会の論理の曖昧さを処理できなくなる。そこから、「論理性への志向」が生まれる。

「論理性への志向」は、定型発達者のために構築され、かつ自分たちマイノリティが投げこまれている人間社会を理解したいという思いを高める。それで「人間観察の貪欲さ」が生まれる。ASD 者は定型発達者への共感が難しいから、その欠落を観察と推理によって補強する。「論理性への志向」はまた煩雑な事象を簡潔に要約したいという「ミニマリズムへの志向」も生み出す。「人間観察の貪欲さ」は、「特定の顔立ちへの親和性」と「コミュニケーションに対する慎重姿勢」を、「ミニマリズムへの志向」は、「反復性の愛好」と「細部への探究心」を生み出す。

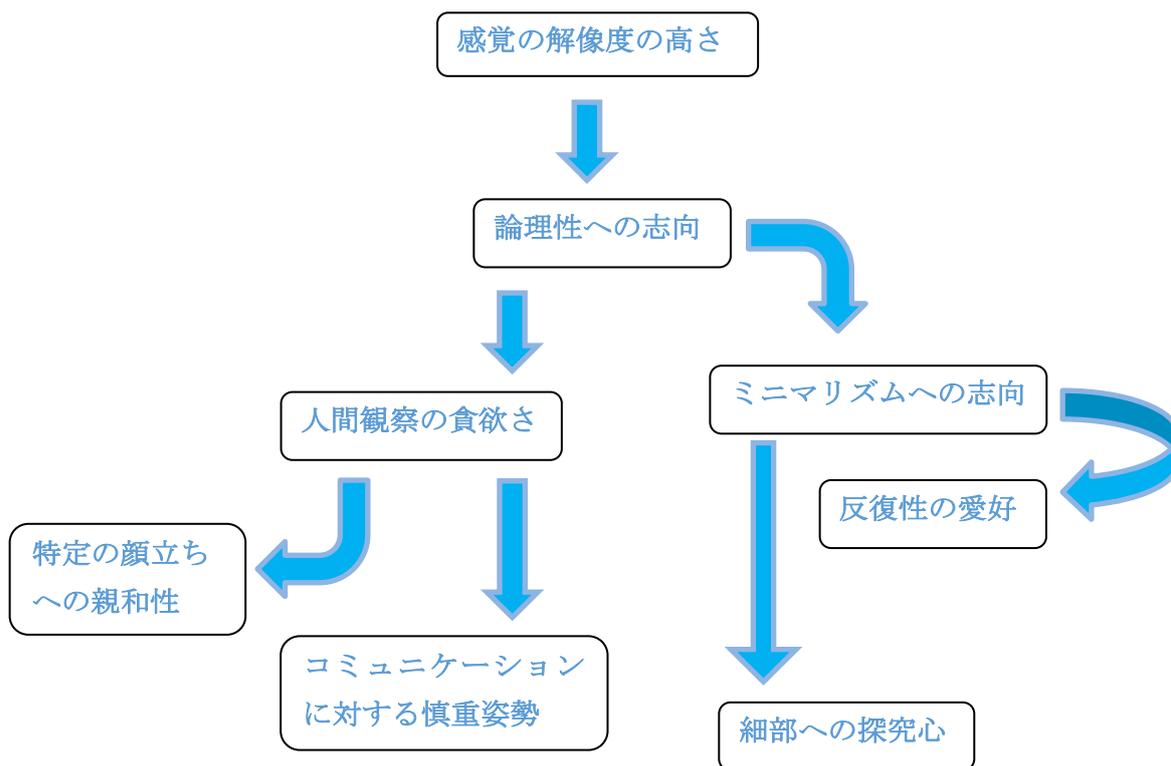
以上の仮説を図示すると、つぎのページに掲載したものようになる。この図は松井さんの精神を構成する「仕組み」になっている。マルティン・ハイデガーはかつて人間存在の構成要素を現存在の実存範疇 (Existenzialien) と呼んで解体したが (Heidegger 2001, 44)、この図は今回のインタビューによって知ることができた松井さんという人間存在に備わった「脳の多様性の実存範疇」と言えるだろう。

8. おわりに

以上で、「当事者批評」をめざした本稿を終える。私は松井さんと文学作品を読むことで、ASD 者を別の角度から捉えなおした。この立場からは、ASD 者はもはや ASD 者、つまり自閉スペクトラム症者と呼ばれるべきではない。仮に名づければ、ASD 者とは「高感覚解像度人間」(Sensory

High-Resolution Person) だ。略せば〈SEHRP〉、つまり「セアプ」。シープ (sheep、羊) にもソープ (soap、石鹸) にも似て魅力的な名称だと自負している。

今後は、このような当事者批評の試みを、さらに発展させていきたい。すでに自閉スペクトラム症、注意欠如・多動症、双極性障害を併発している当事者と新しい研究を準備している。また、後日さらに機会を得て、「火星のミス・マーブル」、松井さんの「実存範疇」をさらに解明できればうれしい。松井さんに感謝しつつ、本稿を終える。



参考文献

遠藤周作 (1991) 「小説を読む悦び」、『新潮』1991年1月号、新潮社、294-296ページ。

河野多恵子 (1990) 『みいら採り猟奇譚』、新潮社。

國分功一郎／熊谷晋一郎 (2020) 『責任の生成——中動態と当事者研究』、新曜社。

斎藤環 (2021) 「発達障害当事者の感覚世界」、『日本経済新聞』、2021年6月5日、朝刊、28面。

サックス、オリヴァー (1997) 『火星の人類学者——脳神経科医と7人の奇妙な患者』、吉田利子 (訳)、早川書房。

ジュースキント、パトリック (1988) 『香水——ある人殺しの物語』、池内紀 (訳)、文藝春秋。

リンコ、ニキ (2007) 『自閉っ子におけるモンダイな想像力』、花風社。

フリス、ウタ (2009) 『新訂 自閉症の謎を解き明かす』、富田真紀／清水康夫／鈴木玲子 (訳)、

- 東京書籍。
- 増當竜也 (2017) 『勝手にふるえてろ』大九明子監督インタビュー「人生上手く渡り切れてない全ての“人間”に向けて…」」、シネマズプラス、2017年12月22日。(https://cinema.ne.jp/amp/article/detail/40861?page=2)
- 村中直人 (2020) 『ニューロダイバーシティの教科書——多様性尊重社会へのキーワード』、金子書房。
- 横道誠 (2020) 「当事者研究、脳の多様性、間テクスト性、芸術効果、心的外傷後成長——自己エスノグラフィーに依拠して」、『パハロス』、エスノグラフィーとフィクション研究会 (編)、1号、2020年9月、77-147ページ。
- 横道誠 (2021) 『みんな水の中——「発達障害」自助グループの文学研究者はどんな世界に棲んでいるか』、医学書院。
- 綿矢りさ (2010) 「主人公の声を聞くみたいにして書いた」、綿矢りさ『勝手にふるえてろ』文藝春秋特設サイト。(https://www.bunshun.co.jp/pick-up/furuetero/interview/index.html)
- 綿矢りさ (2010) 『勝手にふるえてろ』、文藝春秋。
- [APA] American Psychiatric Association (編) (2014) 『DSM-5 精神疾患の診断・統計マニュアル』、日本精神神経学会 (日本語版用語監修)、高橋三郎 / 大野裕 (監訳)、医学書院。
- Bühler, Christina (2007), *Betrachtungen zu Patrick Süskind "Das Parfum": Vom Animal zum Künstler: Das Psychogramm eines Duftgenies*. München (GRIN).
- Chisholm, Katharine / Lin, Ashleigh / Abu-Akel, Ahmad / Wood, Stephen J. (2015), "The Association between Autism and Schizophrenia Spectrum Disorders: A Review of Eight Alternate Models of Co-Occurrence," *Neuroscience and Biobehavioral Reviews* 55, pp. 173-183.
- Heidegger, Martin (2001), *Sein und Zeit*. 18. Auflage. Tübingen (Max Niemeyer).
- Komeda, Hidetsugu et al. (2015), "Autistic Empathy toward Autistic Others," *Social Cognitive and Affective Neuroscience*. Volume 10 (2), pp. 145-152.
- Körte, Peter (2006), „Immun gegen das Böse: „Das Parfum““, *Frankfurter Allgemeine Sonntagszeitung*, 13. September 2006. (https://www.faz.net/aktuell/feuilleton/kino/video-filmkritiken/video-filmkritik-immun-gegen-das-boese-das-parfum-1105448.html)
- Lüthi, Max (1981), *Das europäische Volksmärchen. Form und Wesen*. 11. Auflage. München (Francke).
- Savarese, Ralph James (2018), *See It Feelingly: Classic Novels, Autistic Readers, and the Schooling of a No-Good English Professor*. Durham, NC (Duke).
- Sinha, Pawan (2014), "Autism as a Disorder of Prediction". *PNAS. Proceedings of the National Academy of Sciences of the United States of America*. Vol. 111 (42), pp. 15220-15225.
- Wing, Lorna (1981), "Asperger's Syndrome: A Clinical Account," *Psychological Medicine*.

Vol. 11 (1), pp. 115–129.

(註) 本稿は、2021年8月9日に開催されたエスノグラフィーとフィクション研究会「『みんな水の中』オンライン合評会（併催：著者による口頭研究発表）」での口頭発表にもとづいている。